

研究所だより

第485号
2025年 5月 9日
発行：土佐清水市教育研究所
TEL 82-3015

“ 夏も近づく八十八夜 野にも山にも若葉が繁る

あれに見えるは 茶摘じゃないか

茜禪（あかねだすき）に 菅（すげ）の笠 ”

『茶摘（ちゃつみ）』 1912（明治45）年 日本の唱歌



～新緑がまぶしい季節となりました！～

暦の上では「立夏」（5日）が過ぎました。庭先や野山ではツツジやサツキがきれいに咲きほころび、木々の緑は初々しく鮮やかな緑色となり、少しずつ夏を感じさせてくれる頃となりました。

各校では校長先生のリーダーシップのもと、学校教育目標・研究主題の具現化に向けてチーム丸となって取り組んでいることと思います。春運動会実施の小学校では、運動会の目標を明確にし、時間を有効に活用しながら練習に取り組んでいるようです。

「指導と評価」2025. 4月号より

チームワークを通して育まれる教師の専門性とは

きただ よしこ
北田 佳子
埼玉大学教授

日本には、「授業研究」というチームで教師の専門性を高めていく特有の実践があり、近年は海外から注目が集まりさまざまな国で広く展開している。他国では、教師が自身の専門性を高めるために大学の講習を受けたり、民間のワークショップに参加したりと個人で研鑽を積むことはあっても、同僚と授業を見合い協働で専門性を高めていく「授業研究」のような実践はきわめてめずらしい。

しかし現在、日本の多くの学校が「授業研究」がうまく機能せず形骸化しているという問題を抱えている。そこで今一度、「授業研究」によるチームワークを通して育まれる教師の専門性には、個人の研鑽に代替できない重要な特徴があることを確認しておきたい。

●「暗黙の前提」や「言行の不一致」に気づく

例えば、「子どもたちの主体的な学びを大事にしたい」と思っている、なかなか授業がうまくいかないといったことはないだろうか。

「反省的实践家」の専門家を提起したドナルド・ショーンと、彼の共同研究者であるクリス・アージリスは、示唆に富む次のような概念を紹介している。私たちにはまず「信奉理論」、つまり、自らの言動の基盤にあると本人が自覚し明示的に語られる目標や仮説や価値観がある。先の例で言えば、「子どもたちの主体的な学びを大事にしたい」と自らが語る「理想」である。

同時に、私たちには「使用理論」、すなわち、自分の実際の言動の背後にある「暗黙の前提」のようなものがあるが、本人は無自覚であるため明示的に語られることはない。例えば、「主体的な学び」を理想としながら、実際の授業では子どもの活動のほとんどを教師がお膳立てしているような「言行の不一致」に教師本人が気づかないといったことはよくある。さらに、どこまで教師のお膳立てが必要かという想定のない、子どもの可能性を低く見積もる暗黙の前提の存在にも無自覚であることが少なくない。

ショーンとアージリスは、この不一致自体が問題なのではなく、不一致に気づかず、またなぜ不

致が起きているかを考える機会のないまま実践を続けることが大きな問題であると指摘している。自らの暗黙の前提や言行の不一致に本人だけで気づくのは至難のわざである。だからこそ、校内で実施する「授業研究」の場で、同僚と互いの授業を見合い学び合うことで、それぞれの暗黙の前提や言行の不一致に気づき、実践の再考と改善につなげる専門性を培っていくことが重要となる。

●複数の「事実」の存在に気づく

しかし、「同僚と互いの授業を見合い学び合う」ということは、口で言うほど簡単ではない。自分の授業を他者に見せることに抵抗を抱く教師は少なくない。こうした抵抗感を少しでも緩和しようと、教師が空き時間に気軽に同僚の授業を見に行ける期間を設けたり、事後の振り返りは特にせず授業を見合う頻度を上げる工夫を行っている学校もある。だが、授業を見合うだけで学び合えるわけではないことに注意が必要である。さらに言うと、せめて見合うだけでも何らかの学びがあると思いがちだが、教師の専門性の観点から言えば、逆に「見ただけで学んだような気になる」といった現象や、自分の固定した見方をさらに強化してしまう事態を招きかねない。

私たちは、授業を見る際、同じ出来事を目の前にしても、一人一人がもつ価値観や経験や知識等によって形成されたフレーム（枠組み）によって、何をどのように見ているかは異なる。

「事実」を表す「ファクト（fact）」という英単語があるが、この語源はラテン語の「作る」を意味する「ファクレ（facere）」にある（同じ語源をもつ言葉に「工場」を意味する「ファクトリー（factory）」がある）。私たちは、ともすると「事実（ファクト）」はただ一つと思いがちだが、この語源が示すように、一人一人のフレームによって取捨選択された情報が、各自のなかで「事実」として作られていくのであり、その意味では、人の数だけ「事実」と言っても過言ではない。その複数の「事実」のうちどれが本当かという問題ではなく、それぞれの人のなかではいずれもまぎれもない「事実」なのだということを認識しておく必要がある。



仮に、同じ一つの授業を見ていても、どこに着目しそれをどう意味づけるかは教師によって異なることはよく起きる。事後協議会で、ある教師は「Aさんは楽しそうに学んでいた」と語り、別の教師は「Aさんは楽しそうにふりをしていただけで本当は学べていない」と主張し、それぞれの見取りに基づく「事実」が対立することもあるだろう。このようなとき、どの教師の語る「事実」が本当かを議論しても生産的な協議にはならない。むしろ、具体的にAさんのどのような様子から、一方は「楽しそうに学んでいる」と考え、他方は「学べていない」という考えにたったのかを検討し合い、それぞれの教師の見方の背後にある互いのフレームの存在に気づいていくことのほうが重要である。自身のフレームに無自覚でいると、知らず知らずのうちに、そのフレームに合致する情報だけを取り入れて「事実」を作り上げ、多様な見方の可能性が大きく制限されてしまうことになるからである。

先ほどの「暗黙の前提」や「言行の不一致」同様、教師が一人で自身のフレームの存在や、複数の「事実」があることを自覚するのはきわめて難しい。そのため、やはり「授業研究」という場を活用しながら、同僚と互いの授業を見合うだけで終わりにするのではなく、それぞれの見取りを交流し、複数の「事実」に学びながら、既存のフレームに固執しない柔軟な見方ができる専門性を育てていく必要がある。

●全校の子どもたちをともに育てるチームとして

現在、働き方改革の一環として自校の「授業研究」の時間を削減し、教師の個々のニーズに応じた自主研修や、個人の都合にあわせたオンデマンド教材の視聴などに充てる学校もでてきている。もちろん、教師が個人で専門性を磨くことの重要性は改めて言うまでもない。しかし、これまで述べてきたように、同僚との協働によってしか気づけない重要なポイントがいかに教師の専門性の構築に重要な役割を果たしているかを忘れてはならないだろう。

さらに強調しておきたいことは、そもそも、大前提として、教師は学校全体の子どもたちをチームで育てるという重要な協働業務に携わっている存在であるということである。この大前提を踏まえるならば、校内で実施する「授業研究」は、単に個々の教師の授業に関わる専門性を高めるだけでなく、教師一人一人が互いの専門的成長に寄与し合うかけがえのない同僚として、信頼関係を築いていく営みであることも心に留めておきたい。



＝第75次土佐清水市教育研究集会・組織教研＝

4月30日（水）、清水中学校（部会研修）と今春高台移転（清水中南側に隣接）したばかりの清水高校（全体会）を会場に「第75次土佐清水市教育研究集会・組織教研」が開催されました。

今年度から、今までの部会組織（教科・課題別）を見直し、教育委員会が掲げている「教育の魅力化推進事業」の内容に沿った6部会を新たに設定し、61名でスタートしました。

全体会（開会行事・講演会）では、講師に垣内 守男氏（元県立高校校長、県教育センターアドバイザー、文教協会顧問）をお招きし『万次郎の生き方・学校ビジョンについて』と題してお話をいただきました。限られた時間でしたが、ジョン万スピリットや学校ビジョンづくりのノウハウ等、貴重なお話を聴くことができました。今後の部会研究や、校内研修にもつながるお話であったと思います。

各部会研修では、組織作り・研究テーマ・年間計画・予算等について熱心な話し合いが行われました。下記に各部会の部長、部員数、研究テーマ、計画等を紹介します。（高校からの参加もありました）

～開会行事・講演会～



【斧川教育長挨拶】

—講演—

【垣内 守男氏】

「万次郎の生き方・学校ビジョンについて」

①探究的な学び部会		『深い学びのある授業づくりの研究』	
佐竹 正史	4月30日	役員選出、研究テーマ設定、年間計画等、予算、情報交換等	
(9名)	8月 1日	探究的な学びを実現するための実践交流、指導案検討、講師招聘	
	11月 5日	研究授業（清水小：川村 碧人）、実践交流、講師招聘	
	1月15日	年間総括	
②ふるさと教育部会		『地域人材を活用したふるさと教育の研究』	
平林 也奈	4月30日	役員選出、研究テーマ設定、年間計画等、予算、情報交換等	
(17名)	8月 1日	実践発表（足摺岬小・清水中）、ジョン万に関する学習・講演会	
	11月 5日	実践発表（清水小・三崎小）、シオ学習に関する現地学習・講演会	
	1月 9日	年間総括	
③なかまづくり部会		『互いに認め合う集団づくりを目指して』	
小橋 歩	4月30日	役員選出、研究テーマ設定、年間計画等、予算、情報交換等	
(14名)	8月 1日	講演会（講師招聘）	
	11月 5日	実践交流、情報交換等	
	1月未定	年間総括	

④教育DX部会		『デジタルを活用した授業改善』	
増山 賢太	4月30日	役員選出、研究テーマ設定、年間計画等、予算、情報交換等	
(10名)	8月 1日	「プログラミングの仕方」(池本晃翔)、各校の実践報告	
	11月 5日	実践交流（生成 AI を使った授業について）	
	1月23日	年間総括	
⑤養護部会		『地域に根ざした健康教育』	
古井 椋子	4月30日	役員選出、研究テーマ設定、年間計画等、予算、情報交換等	
(5名)	6月 5日	県発表の準備、保健関係書類の見直し、教材作成	
	7月 8日	//	
	8月 1日	教材作成、情報共有、保健マニュアルの作成	
	10月未定	教材作成、情報共有	
	11月 5日	教材作成、情報共有、保健マニュアルの作成	
	12月未定	「清水の教育」原稿の作成	
	1月未定	年間総括	
⑥事務部会		『学校事務をふかめる ― 組織の一員としてできる学校事務を考える』	
中村 盛二	4月30日	役員選出、研究テーマ設定、年間計画等、予算、情報交換等	
(6名)	8月 1日	講演会（講師招聘・防災研修）	
	11月 5日	学校事務冊子の研修（研究）、情報交換等	
	1月未定	年間総括	

～部会研修～

①探究的な学び部会

②ふるさと教育部会

③なかまづくり部会

④教育DX部会

⑤養護部会

⑥事務部会